

若手の会・国際交流委員会共催セミナー 「先達から聞く若手研究者向け国際学術交流！—国際的研究の進め方—」

国際交流委員長 倉持 清美

本セミナーの目的は、グローバルな研究活動を検討している若手研究者のスタート支援や今後の活動促進に寄与させることにあった。若手の会と共催で、5月30日13時10分から15時10分までの二時間を二部に分けて開催した。第一部では、京都女子大学の表真美氏による基調講演、第二部では、小グループに分かれ、食物、被服、児童、原論、教育分野でグローバルに活躍されている先生方と参加者間で質問や学術交流の場を設けた。以下が、記録担当者によるセミナーの報告である。

第一部 基調講演

国際的研究を進めるために大切なこと

—欧州における調査から—

講師 京都女子大学 表 真美 氏
座長・記録 東京学芸大学 渡瀬 典子

国際的な規模による研究をどのように進めるか、研究のきっかけをどのように創出するか…。多くの方々がこのことに関心をお持ちではないだろうか。そこで、第一部は、ヨーロッパ諸国（アイルランド、イングランド、ドイツ、フィンランド、マルタ）における家庭科のカリキュラムや教育実態に関する研究について精力的に取り組んでいらっしゃる表真美氏を講師にお迎えし、ご自身のライフキャリアに関連したエピソードを交え、ご講演いただいた。

1. 国際的研究の契機

IFHE の大会に参加した際に、ご自身の研究テーマに近い海外の研究者と知り合うきっかけが生まれた。また、IFHE や ARAHE 関連の国際会議、学会に複数回出席する中で、海外のカリキュラムスタンダードや教科書に触れる機会があり、自身の研究に活かすことができた。よって、海外で開催される国際会議への出席が、国際的研究の契機にもつながる。

海外における研究活動は、①フィンランドにおける調査（2002～2004）、②ドイツ・アイルランド・フィンランド・マルタにおける調査（2014～2019）がある。例えば、②の調査は、勤務校の在外研究制度等も活用し、アイルランド等を拠点に実施した。研究地の選定は、勤務校教員との共同研究、国際学会・会議で知り合いになった研究者の紹介等による。人とのつながりの中で、現地視察・学校訪問の実施等、様々な研究機会が創出され、研究に結びついていくことが実感された。

2. 国際的研究を進めるために大切なこと

1) IFHE をはじめ、様々な活動に参加し、人々との交流を深める

前項にもあったように、国際学会には研究のヒントや自らの研究の広がりをもたらす人とのつながりがある。まずは、国際学会に参加することが第一歩になるかもしれない。国際学会では、家族の帯同を奨励する空気もあり、子どもを連れて海外の学会に参加することもあった。子どもの生活経験にプラスになるだけでなく、海外の研究者との交流においても、円滑に人間関係を育むことに繋がった。

2) 多くの情報は既に HP 上に公開されているので、事前に関連する基礎データを HP から十分に得る

研究を始めるにあたり、ネット上で得られる情報はあらかじめ収集し、現地でないで得られない情報を焦点化しておく（日本国内にいても実施可能なことと切り分けしておく）。学会発表や論文にすることを想定し、研究によって明らかにしたいことを整理する。

3) 調査の依頼は遠慮しないで明確に行う。文書にて論文公開の許可を得る。得たい情報はしっかりと尋ねたり、要求したりする

調査期間は限られているので、2) で準備したことを踏まえ、現地視察・学校訪問に際し、相手先に質問事項を明示する。内容によっては、公開不可の情報も含まれることが想定されるので、事前に論文化してよいか（情報を開示してよいか）、確認し、許可を得る。

4) データは速やかにまとめて公開する

海外の教育課程や制度を研究テーマに設定する場合、改訂時期との関係から、論文化のタイミングを逸する場合がある。研究として成果を公表するために、現地における研究実践を残すためにも、迅速に研究結果をまとめる方がよい。

ご自身の研究成果や研究活動の道筋と共に、国際的な研究の一步を踏み出すためのヒントをいろいろと伺うことができた、充実した第一部となった。（「第二部 相談・懇談会」にも、表氏にご参加いただいた）。

第二部 懇親・懇談会

部屋 1

講師 工学院大学 飯島 陽子 氏 (食物)
 担当・記録 東京医療保健大学 細田 明美 (食物)
 三重大学 平島 円 (食物)

部屋 1 では、食物分野の専門領域として、工学院大学の飯島陽子氏に、交際交流のあり方やコツについて、アメリカでのポスドク経験を中心にお話しいただいた。その中で、コミュニケーションをとるためには、できるだけ小さな国際学会に何度も参加するのが良いこと、国際学会では口頭発表よりもポスター発表のほうが良いことを教えてくださいました。また、言葉の壁はあるが、研究に必要な専門用語だけはしっかり押さえておき、自信をもって話すことなどのアドバイスをいただいた。

参加者からも言葉の壁についての質問があったが、言葉は慣れと訓練で克服できるので、相手に通じていないことを気にせず、自分の伝えたいことをポスターやスライドなどに書き込み、伝える工夫をすることも大事で、研究への興味を持って、強い意志で望むとよいことを教えてくださいました。

参加者からの質問では、外国に行くタイミングに関するものが多かった。共同研究を行っているなど、研究資金のある場合は、在学中に行くのもいいが、働きに行くのであれば学位を取ってからのほうが良いこと、留学であれば、外国で教育を受ける機会を得ることはよいが、博士の学位をとるのは日本よりも大変であることとご回答された。

そのほか、生活面でのトラブルなどについても、質問があったが、ご苦労された経験を楽しく聞かせてくださいました。

部屋 2

講師 横浜国立大学 薩本 弥生 氏 (被服)
 担当・記録 日本女子大学 武本 歩未 (被服)
 聖心女子大学 西原 直枝 (被服・住居)

イギリス海外研修のご経験とその後の研究交流について話題提供をいただいた。国際学会はその研究分野の著名な研究者が参加し直接交流できる貴重な機会である。薩本氏も、留学の可能性などを国際会議時に打診したとのことであった。留学先の Loughborough 大学では、サーマルマネキンなどの研究設備も充実しており、様々な被服衛生に関する研究が国際規模で行われていた。薩本氏は、着衣の換気性能に関する研究を行った。海外の研究環境では分業体制がしっかりしているなど、日本との違いから学ぶことも多かったとのことである。留学後も、日本で開催された国際学会の基調講演に留学先の受入れ研究者である Havenith 氏を招聘するなど、研究交流

を継続的に行っている。また、留学中、大学内のインターナショナルデーで浴衣を着用し日本文化を交流した際に、他の被服学の研究者との出会いもあり、そこから着物文化をテーマにしたワークショップの実施や研究が進展した。

薩本氏の場合は、お子さんを連れての「子連れ留学」であった。留学の機会が得られる数年前から、訪問先研究室の視察を行うとともに、子どもの学校や教育制度、治安を確認するなど準備を行った。海外での生活は大変充実していたが、特に子どもには、ことばの問題など負荷がかかりやすい。そのため週末や夏休みの過ごし方、学校に入る前の語学スクール等を含め、子どもの精神面のケアを心がけた。

参加者からは、留学する際の研究計画の決め方、子連れ留学について、若手研究者のライフイベント（出産、子育て、就職、留学）など、多くの質問があり、活発な意見交換が行われた。研究したいという気持ちを大切に、接点をつないでいくことで海外での研究のチャンスが出てくるのでは、とのメッセージもいただいた。研究者の留学経験談を聞く機会が少ない中で、具体的なお話によりイメージが湧き励みになった等の感想が得られた。

部屋 3

講師 共立女子大学 小原 敏郎 氏 (児童)
 担当・記録 奈良女子大学大学院 城戸 千晶 (住居)
 東京学芸大学 倉持 清美 (児童)

児童の部屋では、小原氏より、まず、国際学会でどのような発表してきたかを、報告していただいた。そして、発表のために、所属していらっしゃる大学の海外研修を利用したり、科研の共同研究を活用したり、現地で幼稚園教諭として働いている卒業生に協力してもらったり、と、様々な機会をとらえて研究を進め、国際学会で発表なさった経験をお話しいただいた。参加者とのディスカッションから、すべてを一人で頑張って国際学会で発表しようと気負わずに、まずは、英語で書いたポスターを英語が得意な人に見てもらったり、現地での調査は日本語も話せる人を探したり、つてを頼って調査先を紹介してもらったり、など、いろいろつながりを利用したり、協力してもらったりしながら進めていく方法もあることを共有することができた。また、自分が、国際的にこんな研究をしたいということを発信し続けることで、協力してくれる人、助けてくれる人も現れてくる、という経験者もいた。オンライン英会話などを活用しながら、自分の英語のスキルも磨く努力も大切だが、自分に足りないところは他者の協力を得ながら、まずは一歩踏み出してみるとよいのではないかとということ、国際学会で何をしたいのか、あるいは何のために国際的な調査をするの

か、その目的をしっかりと持っていれば、惜しめない努力ができるし、失敗してもそれを糧にして前に進んでいくことができるという示唆も、小原氏からいただくことができた。

部屋 4

講師 西南学院大学 倉元 綾子 氏 (原論)
担当・記録 武庫川女子大学 和泉 志穂 (経営・情報)
埼玉大学 重川 純子 (家庭経営)

部屋 4 では、倉元綾子氏を囲んでの懇談・懇親が行われた。同時間帯に開催の家政学原論部会のセミナーを途中退席してご出席いただいた。以下、質疑応答分を含め、内容を報告する。

国際経験豊富な倉元氏であるが、今回はこれまでに翻訳された書籍にまつわるお話しをご紹介頂いた。それぞれの書籍のキーポイントを含めつつ書籍への思い、原著者の方たちとの翻訳に至るまでの交渉や交流についてご説明いただいた。翻訳に際して、原著者のところへ向かい教えを請いつつ、関係を深めていったことを話されていた。最初の書籍を翻訳に至る経緯についても、ご自身の問題意識に、それまでに培った関係性が大きく関わっていたと振り返られていた。最後には、コロナ禍で家庭科への関心が高まりつつある中、アメリカで最近出版された“The Secret History of Home Economics”についてご紹介いただいた。国内での出版社探し他、様々に大変なこともあったようであるが、ご自身の研鑽とともに家政学を広く知って欲しい、という熱い思いに基づいて行われてきた翻訳を通じた国際交流の様子をうかがうことができた。

部屋 5

講師 京都女子大学 表 真美 氏 (教育)
担当・記録 愛国学院短期大学 三星 沙織 (食物)
大分大学 都甲 由紀子 (被服・教育)

部屋 5 では、第一部のご講演に続き、表真美氏にヨーロッパの家庭科の様子をお話しいただいて参加者の質問にご回答いただいた。

まず、教員養成課程の教員からヨーロッパにおけるジェンダーの意識についての質問があった。男女共修は共通だが、ジェンダー意識は国によって異なる。英国・北アイルランドでは男性が調理実習を教えていたが、アイルランド共和国では女子に家庭科を学んでもらいたいという意識が反映して選択科目の家庭科履修者数は女子の方が多いとのことであった。中学校家庭科教諭から、北アイルランドにおける家庭科の「数学と ICT の利用」について具体的な内容の説明を伺いたいとの要望があった。iPad を利用したり、既製のハンバーグの 3 つの焼き

方を科学的に比較していたと回答された。フィンランドでは長めの授業時間を確保してタブレット端末でのレシビ動画制作をしていたこともお知らせくださった。博士課程の学生から、国際的な活動をしたいがまずは何からやったらよいかとの質問があり、IFHE や ARAHE で発表したり、論文を投稿するよう促された。

表氏がとても気さくにお話しくださったおかげで、和やかな雰囲気での懇親・相談会を終えることができた。

全体的な報告

東京学芸大学 萬羽 郁子

セミナー参加者は 60 名を超えていた。セミナー終了時に実施した参加者アンケートより、幅広い年代の方の興味を持って頂けたようである。年次大会要旨集や年次大会ホームページを見て参加した者が多く、参加理由は「今回のテーマに興味があったから」、「国際的研究を始める予定があり役立てたかったから」などであった。今回は初めてのオンラインでのセミナー開催となったが、第一部の基調講演に続いてブレイクアウトルームセッションを活用した懇親・懇談会を開催したことで、「いろいろな先生方とのお話の機会をいただくことができて大変有意義でした」、「実際にご経験のある先生と、距離が近いような感覚でお話できたことが、とても良かったです」、「普段なかなかお聞きすることのできない具体的なお話をざっくばらんにお聞きすることができて良かったです」などの感想が多く寄せられた。

また、今後の企画・活動について、「オンライン国際学会の情報を得たい」、「国際研究のきっかけ等がわかる企画を希望する」、「多様な分野を含めた学術交流を希望」などの意見や、国際学会発表レクチャーや論文の書き方ゼミナールなどの希望をいただいた。今後の企画・活動の参考にしていきたい。

セミナーを終えて

若手の会代表 実践女子大学 加藤木 秀章

若手の会幹事 有明工業高等専門学校 藤原 ひとみ

今後、IFHE や ARAHE をはじめ、若手研究者にとってグローバルな学術交流・研究発表の機会が多くなると予想される。グローバルな研究活動を視野に入れている若手研究者の活動促進に寄与させるため、今回の若手の会・国際交流委員会共催セミナーは前年度に開催することが出来なかった国際的な研究に関する相談会をコンセプトとした。本セミナーでは、オンライン上でも自由に各部屋を行き来することが可能であり、グローバルな研究の進め方や研究環境について講演者から聞きやすく、かつ質問しやすい有意義な時間が得られていた。今後の家政学を担う若手研究者達のグローバルな研究活動では

本経験・体験をもとに今後の研究活動に邁進することを期待する。

本セミナーの第一部および第二部においては、欧州各国で家庭科教育について研究活動されている表真美先生のご講演を賜りました。第二部では、食物、被服、児童、原論、教育分野でグローバルに活躍されている飯島陽子先生、薩本弥生先生、小原敏郎先生、倉元綾子先生にご講演を賜りました。ご講演いただきました先生方に深く

御礼申し上げます。また、本セミナーの運営・準備に向けて大変お世話になりました国際交流委員会および若手の会の倉持清美先生、重川純子先生、渡瀬典子先生、萬羽郁子先生、都甲由紀子先生、西原直枝先生、平島円先生、和泉志穂先生、武本歩未先生、三星沙織先生、細田明美先生、城戸千晶先生をはじめ、関係各位に厚く御礼申し上げます。

国際的研
究のきっ
かけ
(2005～
2006年)

- IFHEへの参加
- 担当科目「家政学原論」の資料集のため1986年バンコック大会へ初参加
- 2000年ガーナ大会でフィンランドの研究者と知り合う
- 2002年ヘルシンキカウンスルミーティングに参加、フィンランドの研究者と親しくなり、カリキュラムスタンダード、家庭科教科書を入手
- その後IFHE、ARAHEに参加するたびにその国の教科書を入手

国際的研究の経過 (2014～2019年)

2014年：本務校のドイツ語教員との共同研究、フランクフルトへ渡航、ドイツの家庭科についての調査	2016年2月：ドイツ、ニーダーザクセン州オスナブリュック、ハノーファーにおける調査	2016年4月：アイルランド共和国へ、アイルランド小学校、中等学校における調査
2017年1月：英国北アイルランドにおける調査	2017年2～3月：フィンランド・マルタにおける調査	2019年2月：ドイツ・フィンランドにおける調査

国際的研究を進めるために大切なこと (演者のやり方)

- IFHEをはじめ、様々な活動に参加し、人々との交流をふかめる
- 多くの情報は既にHP上に公開されているので、事前に関連する基礎データをHPから十分に得る
- 調査の依頼は遠慮しないで明確に行う
- 文書にて論文公開の許可を得る、得たい情報はしっかりと尋ねたり、要求したりする
- データは速やかにまとめて公開する

Fig.1 第一部表先生の講演資料 (一部抜粋)